

# この実績を見よ

現地  
ルポ

## 天草郡 有明町の早期栽培



★ ★ ★  
 今年の稲作はいつもの全国的に空前の大豊作だと、その本格的な収穫期を待っている状態だが、本県も去る七月の干ばつで、主として陸稲の早期作二、八五四町が収穫ゼロの干害をうけながらも、八月以降の気象条件に恵まれて水稲は立派な成育を見、収穫予想高(九月十日現在)二一〇万石はまずかたいたと、本県でも史上最高の豊作を生み出そうとしている。しかしなお、これからやってくる台風やうんかなど病害虫の問題を残して、水稲普通作ではとくに注意が必要であり、まだ手放してこの豊作を喜ぶわけにはいかないようだ。この点、水稲の早期栽培と農業者は、汗の結晶を眺めながらホツとした表情で控えている。

★ ★ ★  
 そこで、水稲早期栽培の先進地「天草郡有明町」を訪ね、いろいろと現場の様子をうかがってみた。



### 日本一収穫の持主

**有** 有明町役場と書かれた明るくしよ  
 うしやかな建物をあとに、その農業改良普及員香月さんの単車の後に跨がると、ゆるやかな勾配の坂を上つてい  
 った。上りつめたところで大きく視界が  
 ひらけ、そこに有明の海が残暑の陽光に  
 まばゆく照り映えて、点々とする漁船の  
 たゞすまいはいかにものどかである。  
 「このあたりから下津江という部落に  
 入るんですよ。」

いいながら香月さんは間もなく、ある  
 農家の庭先に車を止めた。声をかけると  
 納屋の方から返事がきこえ、中から体軀  
 隆々の若い青年が姿を現した。松崎満正  
 さんである。一家九人の担い手であるそ  
 の青年は、ちようど納屋に造られた高さ  
 一尺五寸、一間四方の常温乾燥器に入つ  
 たモミの代押しをやっているところだつ  
 た。

「いまざつと七石ぐらい入つてい  
 るんですが、ぎつしりつめると十五石ほど入  
 ります。これは改良資金で造つたもので  
 すが、何より直披から入れられるのが特  
 徴で湿度には十分注意を要るわけです。」

### 松崎さん寄付の籾摺機

**畜** 舎の方で牛が啼き出したのをし  
 ひびいてくるある農家の前に相乗りの単  
 車をピタリと止めた。  
 「こゝも松崎さんというんですが、公  
 民館の分館長もやっている人なんですよ  
 。あゝちようどいま籾摺りをやっている  
 ところですね。」  
 見ると、地べたにゴザを敷いた中央に  
 自動籾摺機がでんと坐つて、七、八人の  
 農家の人々がモミを上から入れたり、下  
 から出てくる玄米を寄せ集めたり、モー  
 ターのベルトのあたりで甲斐／＼しく立  
 ち働いている。

「この籾摺機は一昨年の競作会で多収  
 機一位に入つた松崎さんが、賞金十万円  
 なるほど納屋の入口には、ちやんとし  
 た湿度計が下つている。松崎さんは、嘗  
 農試作地として水稲早期栽培の草分けで  
 あり、三十一年には反収四石二斗の米作  
 日本一を獲つた輝かしい実績の持主でも  
 あり、現在町の平均耕作反別六反三畝(一  
 うち水田三反)を上廻る、水田六反五畝  
 畑八反を耕作しながら今年も昨年の反収  
 十俵をはるかに突破する十四、五俵が供  
 出できそうだと張切つている。

をぼんと投げだしてこの部落に寄附した  
 ものなんです。そしてこれは順次各農家  
 へ廻されて使われるのです。」  
 籾殻が吹き落され、それがあたり一面  
 に飛び散る中でこう説明したのは、香月  
 さんと同じ改良普及員の杉谷さんであ  
 る。

### こわごわ始めた早期栽培

**中** 庭に山をなした玄米のそばを縦  
 い家の中に入ると、松崎定喜さ  
 んを中心に、水稲早期栽培についてはな  
 しをひろげてみた。

「私は、こゝが例年の秋落ち地帯であ  
 ることと、毎年少くとも年二回はやつて  
 くる季節風の被害やツマグロやヨコバイ  
 それに雀を加えた病害虫などの被害をど  
 うしたら防げるかと、若いころから考え  
 ていたのですが、オヤジの代ではなかな  
 かこれに対する踏ん切りもつかずにあた  
 りです。さいわい三、四年前から百姓  
 も私ら四十代のさかんなところとなりまし  
 て、真剣に仲間十人位でその問題と取組  
 んだのです。ちようどそのころ、県の農  
 事試験場で水稲の早期植付が一応の試作  
 として十三回に亘つてすすめられ、この  
 部落がその試作地として選定されたので

す。申すまでもなく結果は良好でしたが  
 この栽培法の絶対的な条件として、第一  
 に集団栽培でなければならぬことがよ  
 く呑みこめたので、私たちはリーダー格と  
 して各農家の説得に努力したわけです。  
 点々としてやつたのでは、まず用水を引  
 くにも引けないし、雀や病害虫を一勢に  
 防ぐことすらできないということなので  
 す。とにかく説得の甲斐もあつてか、初  
 めのうちには約七割がまとまり、残り疑  
 心暗鬼のまゝ引き連られてとうとう成功  
 したというわけです。かりにこれが失敗  
 したとしても、すぐ七月の普通作に切り  
 換えることもできるんだ、という考えも  
 ないではなかつたのですが……」

松崎さんは、当時の模様をなつかしむ  
 ように興味深く一氣に語つてくれた。

### 無理のない労力配分

#### 水

稲の早期栽培が台風や秋落ちな  
 どの気象災害を回避するに十分  
 な効果をもちながら、これが農業経営に  
 どのようにプラスされているか、いろい  
 ろと訊ねてみると

「そうですね、水稲早期になつてから  
 は他の作物との労力配分にビークがなく  
 なつたこと、つまり無理がなくなつたと  
 いうことです。

次に反収がぐんとふえたことが何より  
 の収穫ですね。その証拠には普通作にお  
 ける村の平均反収一石七斗が、早期栽培



となつてから二石四斗ないし二石七斗に  
 ふえたんですから、農業所得の面では大  
 きなプラスとなつたわけです。かつてこ  
 の部落の水田農家四十三戸のうち、普通  
 作で供出できた農家はわずかに十二、  
 三戸程度でしたが、いまではその殆どが  
 供出できるようになり、例えば、Aさんの  
 場合では畑作収入が稲作の四倍であつた  
 のが、いまでは逆になつて年収六万円の

増となつていける状態です。この外、早栽  
 あとの自給飼料作物で肥育牛の販売が年  
 に三回ほどできるようになり、農業経営  
 のあらゆる面で豊かさを増し、これに關  
 連して生活改善の必要性もおこり始めた  
 のです。たしかに部落全体として、こゝ  
 一、二年の間に動力脱穀機が二十七台、  
 天日風呂が三ヶ所、小型耕うん機が十四  
 台、通風乾燥機が三ヶ所というように多く  
 の施設が整つ  
 たばかりか、  
 ごらんのよう  
 に、どの農家  
 の台所にも改  
 良かまどや洗  
 面、炊事の設  
 備がきれいに  
 揃いましたよ。」

そう云われ  
 てみて、隣の  
 台所を覗いて  
 みると、採光  
 の加減は悪い  
 にしても、び  
 かびか光つた  
 タイル造りの  
 台所や磨きの  
 かゝつたカマ  
 ドの反射で、  
 全体のうす暗  
 さがカバーさ  
 れているよう  
 に見受けられ  
 た。